

1. 単元名 用具を操作して運動を楽しもう～テニピン～

2. 単元目標

- ・基本的なボール操作とボールを操作できる位置に体を移動する動きによって、易しいゲームをすることができる。(知識及び技能)
- ・打ち方や打つタイミング、打ちやすい立ち位置など自分の課題を見付け、解決するための練習や作戦を考えたり、友達に伝えたりすることができるようにする。(思考力、判断力、表現力)
- ・ルールを守り、仲間と励まし合いながら、進んで練習やゲームに取り組むことができる。
(学びに向かう力、人間性)

3. 基盤 略

4. 単元計画 (全10時間) 略

5. 授業の実際

【視点①】なりたい姿をイメージし、自他の課題や変容の自覚を促す「単元構成と授業構成」の追求
まず、「テニピン」とはどのような競技なのかを知るために、ラケットとボールを見せ、用具の使い方と取扱いのルールを確認して、実際に活動している動画の様子を見せた。その後すぐにラケットを持たせ、2人1組でラリーを行わせた。ネット型ゲームの経験者は相手が打ちやすいところへねらって返球し上手くラリーを続けていたが、中にはラリーが続かない児童もいた。そこでラリーを続けるために自分たちで課題を設定しそれらを達成するために必要な練習の場を設けた。

授業は、①課題の設定→②めあての確認→③スキルアップタイム→④実践→⑤振り返り、という流れにした。授業の流れを固定化することによって、児童は教師の指示や説明がなくても「どの場面でも何をしたらよいのか。」「次にどんなことを考えればよいのか。」ということ意識して自主的に考えたり運動したりしていた。

【視点②】なりたい姿に向かう「基礎感覚や基本技能を高めていくための手立て」の追求

単元のゴールとしてラリーゲームを行うために単元全体を通してテニピンに必要な基礎感覚・基本技能を養う効果的な運動のスキルアップを目指して取り組んだ。

《一人でラケットとボールに慣れる》

- ・風船を使いボールリフティングを行う (フォアとバックを交互に)
- ・一人壁打ちと的当て ・エア打ち

《1対1で打ち方に慣れる》

- ・ワンバウンド打ち ・二人の距離を離して

《ボールに近づくタイミングや場所移動に慣れる》

- ・1対3～4人で

《打ったら入れ替わるタイミングや動きに慣れる》

- ・同じ人数で分かれ、一列に並んで打ったら素早く動き、次の人と交代する。

これらのメニューを行い、だんだん難易度を上げて練習を行っていった。また練習の場の設定は始めに説明をして、それから児童自らが準備をして、見通しをもちやすく、活動に取り組みやすいようにしていった。

【視点③】なりたい姿に近づくための「主体的・対話的で深い学び」の追求

単元を通して友達のいいところを見つけたら積極的に褒め、楽しい雰囲気を作っていこうというめあてを立てた。また活動の中で失敗してしまっても励ましの声をかけ、活動に取り組みやすい雰囲気を作ることを約束した。その中で「今の打ち方がいいよ」や、「もう少しボールをよく見てタイミングよく打つといいよ」など、それぞれを評価し合うことによって、苦手意識のある児童も積極的に活動に取り組み、いろいろな動きを実践しながら自分に合う方法を見つけることができた。

コートのはきは横が6メートル、縦が11.8メートルと本来の正式なコートより少し大きめに設定した。大きくした意図は、体育館のラインを用いコートを設定して児童にとって視覚的にわかりやすく十分な運動場所を確保できることを狙いとしたためである。ゆえに児童はその広さを生かしてコート内で仲間同士で入れ替わったり、場所を狙ったパス、サーブなど行ったりすることができていた。

6. 成果 (○) と課題 (△)

- テニピンを通してネット型ゲームの運動を手軽に体験でき、未経験だった多くの児童が楽しく活動を行うことができた。
- 基本的な動作を定着させるために、風船を使ったラケットの操作やボールの打ち方、ボールを打つための体の移動などについてじっくりとスモールステップで行い、高学年へとつながる知識、技能の習得を行うことができた。
- 得点を獲得することに気持ちが向きラリーが続かなくなることが予想されたが、ラリーを続けることの楽しさに気付き、相手が打ちやすくなるためにボールを高めに戻したり、相手の利き手へ向けボールを打ち返したりして工夫しながら行い、またその中で、「ドンマイ」、「ナイス」など相手への優しい声掛けをする姿も見られ人間関係づくりにも効果的であるということがわかった。
- △2人1組でのラリー練習をする際、相手に配慮しながらボールを打つことが難しいと感じる児童がいた。打ち方を下打ちと指導をしても上から打ったり、力加減が難しく、相手コートに届かなかったりコート内に入らなったり、越してしまったりした。そのためネット型ゲームのラリーを続けることの楽しさに気付かず活動が終わってしまう児童がいた。したがって活動の状況に応じて、得意な子と不得意な子が一緒にペアになるように調整しながらグループ分けをしたり、自分たちの活動の様子を撮影してできているペアと比較したりしながら活動を行っていく必要があると感じた。
- △コートが4つしか確保できず、人数も制限があるため運動量を確保することが難しかった。また待っている児童はボール拾いを行い、時間を過ごすことが多かった。そのためチーム内で何か目標を立てそれに向かっていけるようチームの中で意識の醸成を行えるような支援が必要であった。

